哲學研究
第四百四十一號　第三十八卷第七冊

學習について

矢田部達郎

次に發表される梅本、本吉兩氏の論文は何れもわが國が世界學界の尖端をいく二つの領域に關する總合的考察であるが、私はそれに對する序論を書きうることを誠に光榮と思う。梅本氏の論文は題は類似性に限定されているが學習を規定する諸因子の交互作用一般を取扱つたものである。二十年前私がこの同じ問題を取扱つた時代には學界の興味は主として等質禁止の問題に集中されていた。そこで私の努力も形成禁止（連合禁止）、效力禁止（再生禁止）、及びランシブルグ禁止に對して統一的理解をえようとするところに集中された。もちろん學習移入に關する研究も數多く出ていたのだけれど、それも私には禁止の面だけが特に目立つたわけである。そこでその時私は等質項の累積は連合の形成に對しても、その再生に對しても、痕跡が不安定な場合には、一應同じような禁止效果を及ぼすものと考えてみた。ところがその後いろいろな點でこの假說は限定を必要とすることが明らかにされるようになつた。そのうち最も重要な點は、第一に連合形成に對して等質性はむしろ促進效果を示す場合が多いこと、第二は刺戟の等質性と反應の等質性とはその働き方がちがうことの二點である。

第一作業の後に多少ともそれに類似する第二作業を學習すると、大體においてその能率は促進される。これは第一

作業においてそこで用いられる材料の類的特徴の組織化が起り、第二作業では特に問題となる種的特徴の次元だけに關する辨別が行われればよいためではないかと思われる。ところが第二作業の後に第一作業の再生を檢査するいわゆる後退禁止の事態においては、第一第二兩作業で累積される種的特徴の僅小の差が混亂して、そこに禁止效果が現われる。だから學習移入における等質促進は組織化された種的特徴が類似學習基盤（或る時は再學習基盤）として働くことの效果であり、後退禁止における等質禁止は主として種的特徴の累積による不明化の效果であり、又前進禁止における等質禁止は兩效果の差と考えることができる。もとよりこれは大體の傾向についていうのであつて、實際には種々なる付加條件によつて變容されるものであることはいうまでもない。

第二の重要點である刺戟と反應とにおける等質性の問題は特に對連合學習法を適用する場合に明瞭になるものであるが、倉石氏や梅本氏が反應語に熟知度の高い項目が來る方が學習が容易になることを明らかにした後を受け、森川氏が氏の獨創になる順逆再生勾配を指標とし、刺戟語に類似度の高い項目が來る方が學習が容易になることの意味を明らかにした。この二つの重要な發見の結果、私たちは今日類似性と熟知性との二因子をかなりはつきりと區別することができるようになつた。

一方對連合法を用いる場合の後退禁止においては、同一項目に類似項目を連合させることは容易であるが、類似項目に類似項目を連合させることは容易でない。前者は安定した學習基盤が與えられる場合で、後者は基盤がディフーズで、全部が同じ水準で入り亂れる場合である。もちろんそこには辨別閾の問題乃至意識のスパンの問題等が入つてくるが、その根底にはやはり第一の點に關して强調したゲヌスとスペキーズの問題、ここでいえば熟知度と類似度の問題、一般的にいえば鑑識的知識の領域構成の問題、が重要な役割を演じていることがわかる。これはひいては知識構造一般の根本問題であるといわなければならない。

本吉氏の問題は早く佐藤氏によつて取上げられた辨別學習の移調に關するものであるが、氏は今回は佐藤氏と共に

そこで働く態度乃至セットの役割を強調した。即ち動物や幼兒は元來個體的選擇態度を取ることも、また關係的選擇態度を取ることも共に可能なのであるが、訓練の進行と共にその態度が何れかの方向に安定化するというのである。これは私の考え方とは大變ちがうもののように思われる。私は動物や幼兒には眞の意味での關係的選擇態度というものはないと考えている。即ちかれらにとつては元來は個體的選擇態度だけが唯一の態度なのであるが、その態度に適合する辨別的徵標（徵表）が見當らぬときは、やむをえず實驗者が手掛かりとして殘した問題次元の相對關係を手掛かりに選ぶに過ぎない。かかる手掛かりが選ばれるのは全く實驗者がその實驗計畫中で作つた客觀的狀勢によるのであつて、それを主觀的色彩の強い態度乃至セットという概念で表現するのは適當であるとは思われない。少くともそれはよほど注意して使用しないと誤解を招く恐れがあるものといわなければならない。

いわゆるセットは辨別事態の領域的差異に應じて用意される辨別基盤であるということができるだろう。かかる基盤の上に種的差異の辨別が可能になる。もちろんセットは生體的條件を意味するのであるが、それを規定するのは常に客觀的事態であり、また客觀的事態を操作する以外にはセットを研究する方法はないということを忘れることができない。ただ從來はセットの問題よりもむしろ種的差異即ち辨別徵標のみを問題とする傾向であつたのを、高木氏にしろ、佐藤氏にしろ、倉石氏にしろ、梅本氏にしろ、本吉氏にしろ、種的差異の辨別の基盤となるものに注目したということは、わが國の學者の炯眼であつたということができる。今日ではアメリカでもその點が重要視されて、多くの研究が行われるようになつた。しかしそれはセットという語が示唆しやすいような辨別態度の問題ではなく、客觀的な辨別的知識の基盤の問題であり、同樣に客觀的な學習基盤の問題であり、ひいては上述の知識構造一般の問題であることを、はつきりと意識しなければならない。

心理學ではこの辨別基盤、判斷基盤、學習基盤の問題は必ずしも新しい問題ではない。ヘルバルトの統覺表象群や、ビューラアの場所指示の機能の如きがその代表的なものということができる。しかしそれらはただ理論に過ぎな

かつた。エビングハウスがかれの鋭敏な實證的精神によつて、記憶材料からあらゆる熟知性と類似性とを除去して以來、心理學は暫くこの問題を括弧に入れてその研究を進めて來たのである。今や再びこの問題を實證的水準において取扱うことができる時代が來た。それは熟知性や類似性を、從つてまた辨別基盤と辨別徴標とを區別して操作することが可能になつたからである。これによつて恐らくかの分配學習效果や過剰學習效果や消去抵抗に關する數々の謎が解ける日の近づいたことを感じるのは筆者ばかりではあるまい。この輝かしい出發點がわが國の學者たちの努力によつて切開かれたということは何といつても喜ばしい限りである。細部に亘る考察は後日に讓るとして、ここにはただ次に述べられる二つの論文の意義について紹介の勞を取つた次第である。

（了）

（筆者　京都大學文學部「心理學」教授）

前號目次

實存哲學について……ゲルハルト・クナウス
聖トマスに於ける esse と existere について（承前）……山田　品
—existere の意味の探求・第四トマスの用法(二)—
最高善について……南澤　貞美
—カント倫理論の課題—
新岩外國雜誌所載論文一覽
彙報